2025 年度 4 月入学　修士課程
一般入学試験・国費留学生等入学試験・学内選抜入学試験（第 2 回）
2025 年度 9 月入学　修士課程
学内選抜入学試験（第 1 回）・海外指定大学特別選考
事前課題

課題文を読んで、2500 字から 3000 字程度で設問に答えなさい。その際、資料や文献を参照し、それらを明記すること。参考文献や引用文献等のリストも上記文字数に含みます。

設問

筆者の考えをまとめたうえで、日本語教育の文脈で異文化理解を考える際、境界線の問題をどのように捉えたら良いか、あなたの考えを述べなさい。

課題文

文化人類学を勉強しようとする学生のなかには「多文化共生」や「異文化理解」に興味があって、日本と外国の文化の違いを調べようとする人が少なくありません。たとえば、国際結婚のカップルがどのように文化の違いを乗り越えて理解し合うのか、といった調査計画をもってきます。でも、そういう学生には「その異文化理解という言い方自体が、異文化理解的じゃないんだよ」と伝えます。だいたいは何を言われているのかわからず、きょとんとした顔をされてしまうのですが。

「わたしたち」と「かれら」の境界線は、ひとつの固定したものではありません。むしろ複数の線の引き方があります。イスラムを信仰している人のなかには男性もいれば、女性もいます。だとしたら「日本人」と「イスラム教徒」という線の引き方だけが唯一の境界ではありません。男性と女性という境界線を引けば、日本人の半分とイスラム教徒の半分は、同じ「仲間」になります。

子どもと大人という線を引いてもいいでしょう。地球温暖化などの環境問題を考えるときは、宗教の違いよりも、若い世代と上の世代との利害対立のほうが重要になる局面もあります。「宗教」や「国境」という線引きだけで私たちは「分断」されているわけではない。むしろ、その境界がひとつしかないとする前提こそが、深い「分断」があるかのようなイメージをつくりだしている。

そんなとき、異なる複数の境界線を引くことが既存の境界を乗り越えるために必要な想像力になります。だから「異文化理解」を考えたいのなら、ほんとうに「異文化」なのかどうか、どんな意味で「異文化」とされてきたのか、そこで引かれている境界線とそれに沿って見いだされている差異そのものを疑うところからはじめないといけない。

複数の境界線を引いてみると、どの境界線によって浮かび上がる「差異」も、けっして絶対的なものではなくなります。国や宗教の違い以外にも、私たちはさまざまに異なっている。そう考えると、日本と外国を最初から「異文化」だとみなす考え方が、いかに狭い見方かがわかるでしょう。

そんなことできるのか？と疑問に思う方がいるかもしれません。でも、じつは、私たちは歴史的にそういう境界線の引きなおしをずっと繰り返してきました。

人間は差異に満ちた他者とともに生きてきました。そのなかで、いろんな他者を「わたしたち」にしてきた。それは三万八〇〇〇年前まで人が暮らしていなかったと考えられる日本列島も同じです。

歴史的にみれば、さまざまな人びとがいろんな場所から流入して生活するようになり、敵として互いに殺し合ったり、暴力的に占領したりする関係にあったにもかかわらず、「日本人」というひとつの仲間意識が浸透するようになりました。

つまり、「わたしたち」と「かれら」との境界線を開き、別の境界線でくくりなおす作業をずっと行ってきたのです。ただし一度、境界線が引かれると、それが固定化し、しだいに唯一の絶対的な境界線に見えるようになります。多様な人びとがいる日本列島に、ずっと昔から単一の文化

をもつ日本人だけが暮らしていたように錯覚してしまう。そのことがひとつの弊害をもたらします。

松村 圭一郎（二〇二〇）『はみだしの人類学 ともに生きる方法』ＮＨＫ出版, pp.71-72.